

『紫式部日記』 左京の君事件の記述態度

—— 彰子後宮の漢詩文受容の問題からの考察 ——

岡 部 明日香

はじめに

本稿では「紫式部日記」の「左京の君事件」と呼ばれる挿話を取り上げ、この事件の記述の意義や特徴と、「紫式部日記」の彰子中宮周辺の女房による、いわゆる「後宮サロン」（以下「彰子後宮」と称す）礼賛に対する漢詩文の役割までを考えた。この事件は、従来紫式部自身の性格や当時の女房気質を示すものとして取り上げられてきた。特に今回は、この作品固有の特徴として、相手の返歌を記さないことについて、漢詩文との関係を中心に論じた。

一、左京の君事件の概要

この出来事は、寛弘五年十一月二十二日の童御覧の折のことである。一条天皇には、中宮藤原彰子の他四人の后妃がいたが、その一人弘徽殿女御（内大臣藤原公季女）の弟藤原実成が、五節の舞姫を奉っていた。このとき、紫式部をはじめとする中宮女房が、

かつてこの女御の女房だった左京の君という女性に、匿名で嘲弄の和歌や贈り物をした。それが内大臣藤原公季の目にとまり、中宮からの消息と勘違いして、後日改めて豪奢な返礼の細工物や藤原長能作の返歌を送ってきた、というのが事件のあらましである。

左京の君は、既に宮仕えを退いており、今回は藤原実成が出した舞姫の介添え役として内裏に参入していた。一般にこの挿話は「左京の君事件」と呼ばれ、左京の君に対する残酷な嘲弄から、紫式部自身の性格や宮仕えへの自己嫌悪といった心理分析的な解釈がなされ、さらには当時の彰子後宮と弘徽殿女御後宮との対抗意識などとの関連で論じられてきた。事件の問題点と研究史を概観すると、次のようになる。

左京の君の参内が紫式部達の反感を招いた理由について、一つは、元の女御付の女房が舞姫の介添え役（陪従）になることは零落であり式部達はそんな彼女を嘲弄したという、従来採られてきた見方と、もう一つには左京の君は内大臣家に特に請われて、介

添えの筆頭役として采配を振るい、その態度が、全てに消極的な「埋もれたる」奥ゆかしさをよとする中宮方の価値観に反したために、嘲弄から「紫式部日記」での筆誅まで受けたとする見方がある。

特に後者は、陪従の席次の分析からの安藤重和氏の一連の論考で提示された。他に、五節と平安文学の關係を論じた原田敦子氏は実成献上の五節の先蹤として、正暦四年「枕草子」の定子中宮の五節を指摘する。

宮の五節出させたまふに、かしづき十二人、ことどころには御息所の人出すをばわろきことにぞすると聞くに、いかにおほすにか、宮の女房を十人出させたまふ。(中略)辰の日の夜青摺の唐衣、汗衫を着せさせたまへり。(中略)赤紐もいみじう結び下げて、いみじくやうしたる白き衣に、かた木のかたは絵に書きたり。織物の唐衣の上に着たるは、まことにめづらしきなかに、童はいま少しなまめきたり。下仕までつづき立ちて着たる、上達部、殿上人おどろき興じて、小忌の女房とつきたり。

このとき中宮の女房を十人も介添えに付けたことや、青摺の唐衣に赤紐という統一の衣装を着けたことが、実成の五節に受け継がれ、その趣向を賛美した大斎院選子内親王の和歌がある。

おなじ人の五節のわらはのかざみかしづきの唐衣に、あをずりをしてあかひもなどつきたりけり、人々見はべりけるに、あをさ紙のはしにむすびつけさせ侍りける

選子内親王

神代よりすれる衣といひながらまた重ねてもめづらしきかな

(後拾遺和歌集) 卷十九雜五・二二三

こうした定子中宮時代を模倣する意識から、むしろ左京の君の再出仕は、若い舞姫達を監督する重い役目であったという論の根拠ともなっている。

ただし、従来の研究では、こうした背景の解明が進んでも、この場面の読みとしては、依然として紫式部と中宮女房の嫌悪をそのまま記した個人的な記事という見方が多い。以下この贈り物の暗示を、『紫式部日記』の記述に沿って読み解いてゆきたい。

「かの女御の御かたに、(ア)左京の馬といふ人なむ、いとなれてまじりたる」と、宰相の中將(源経房、むかし見知りて語りたまふを、「一夜かのかひつくるひにてあたりし、東なりしなむ左京」と源少将(源济政)も見知りたりしを、ものよすががありて伝へ聞きたき人々、「をかしうもありけるかな」といひつつ、いざ、知らず顔にはあらじ。(イ)むかし心にくだちて見ならしける内裏わたりを、かかるとまにてやは出て立つべき。(ウ)しのおと思ふらむを、あらはさむの心にて、(エ)御前に扇どもあまたさぶらふなかに、蓬菜つくりたるをしも選りたる、心ばへあるべし、見知りけむやは。

笥のふたにひろげて、(オ)日蔭をまろめて、(カ)そらいたる櫛ども、(キ)白きもの、いみじくつまづまを結びそへたり。

「(ク)すこしさだすぎたまひにたるわたりにて、櫛のそり

「ざまなむなほほしき」と、君達のたまへば、今様のさまあしきまでつまもあはせたるそらしぎまして、(ケ)黒方をおしまろがして、ふつつかにしりさき切りて、白き紙ひとかさねに、立文にしたり。大輔のおもとして書きつけさす。

おほかりし豊の宮人さしわきてしるき日かけをあはれとぞ見し
(二八一頁)

この顛末は、五節の童御覧の日、左京の君への消息(前半)と、その五日後賀茂の臨時祭の日、藤原教通宛ての返事(後半)とに分けられるが、ここでは前半を掲出した。

この場面での贈り物、傍線部(エ) (ケ)は、介添えの装いに必要なもので統一されているが、どれも言外に嘲弄が込められている。例えば傍線部(エ)の扇のように「心ばへあるべし、見知りけむやは」と仕掛けをはのめかす文章や、(カ)「そらいたる櫛ども」(儀式用の飾り櫛とされる)を(ク)「さだすぎた」左京の君へのあてつけに「今様のさまあしきまでつまもあはせたるそらしぎま」にしたというの一番よくわかる場所である。この他(オ)「日蔭(の蔓)」も、神事や天の岩戸神話との連想の他に、存在を隠そうとする左京の君に光る白絹の日蔭の蔓を示してのいやがらせや、「あなたは日蔭者」との揶揄など、さまざまな意味を考へることができよう。この他に(ケ)「晴れの日の薫香である「黒方」も「ふつつかにしりさき切りて」という表現から、やはり嘲弄を読むことも可能である。これら一つ一つの事物の典拠や詳しい意味は、現代の注釈では不明のものもあるが、全体として「嘲弄」を暗示することはみてとれる。

この場面の最後を飾る和歌は、表面上は、「大勢いる五節に奉仕する人々の中でもとりわけ目立つ、あなたの日蔭の蔓を¹⁰しみじみと拝見しました」という意味である。左京の君への皮肉をどの程度読みとるべきかは、それぞれの作品の記述によって微妙に違ってくる。例えば「紫式部集」¹¹に、

侍従宰相の五節の局、宮の御前いと近きに、弘徽殿の右京が、一夜しるきさまにてありしことなど、人々言ひ出でて、日蔭やる。さしまぎらはすべき扇などそへて

おほかりし豊の宮人さしわけてしるき日かけをあはれとぞ見し
(紫式部集、九〇)

とあることから、安藤論のように、「かしづき十人の上席を占め、「いと慣れて」振舞う」彼女の態度に「目立ちすぎる態度を改めないなら、せめてこの扇で隠して恥じ入りなさい」という抗議の意を読むこともできるが、「見ならしけむ百敷をかしづきにて見るらんほどもあはれに思ふらんといひて」(後拾遺和歌集)雑五一一二詞書)また、「あはれ、昔ならしけん百敷を、もの、そばに居隠れて見るらんほどもあはれに。いざ、いと知らぬ顔なるはわろし、言一つ言ひやらん」など定めて、「(栄花物語)初花」のように、宮中を陪従の身で再び目にした「零落の人」として左京を描き、憐れみと軽い嘲弄を強調する作品もある。この中で、「紫式部日記」の書こうとした「左京の君事件」について次節以降で考えてみたい。

二、蓬萊山の寓意と「海漫漫」

「蓬萊山」の模様を描いた扇には紫式部が「心ばへあるべし、見知りけむやは」と断り書きを入れていることから、特に皮肉をきかせた趣向であった。この記述が「べし」「けむ」といった婉曲を用いた理由については既に論があるが、読者の注意を喚起するために執筆時に挿入されたと考えてよいだろう。

さて、この場面の蓬萊山の意味については、一般には「蓬萊山という不老不死の仙境を示して左京の身の変転と対比し椰揄したもの」(中野幸一¹⁵氏)とか、「年老いても若々しく介添となつて左京に、不老不死の仙人の住む蓬萊の絵の扇こそふさわしいと、皮肉な趣向」(山本利達¹⁶氏)などの解釈が一般的である。この他、この贈答を「古語拾遺」記載の「天の岩戸」神話と重ねて、本文の「蓬萊」を「豊の宮」「蓬萊山」のような神仙世界を意味する言葉¹⁷(新聞一美氏)とする解釈があり、新聞氏はまた、「古語拾遺」神話の影響が、平安時代の五節に関する和歌に多く現れることを指摘している。

ところでこの時代、蓬萊山を記した「史記」や「列子」などの基本的な資料は日本に渡来して久しく、庭園でも池の中の島を蓬萊山に見立てるなど、広く知られた知識ではあった。しかし、全ての平安貴族が原典を読みこなしたわけではなく、類書や白居易の新樂府「海漫漫」を用いて要点を理解していた、ということが、近藤春雄氏などの調査で明らかになっている。次に「海漫漫」の本文を掲出するが、本稿の新樂府は平安時代に読まれた旧

鈔本である神田本を翻刻した。ただし、他の旧鈔本系諸本や版本系の諸本を参考に字句を校訂した箇所は黒太字で示した。

海漫漫 戒求仙也

1 海漫漫。

2 直下無底旁無邊。

3 雲濤煙浪最深處。

4 人傳中有三神山。

5 山上多生不死藥。

6 服之羽化為天仙。

7 秦皇漢武信此語。

8 方士年々採藥去。

9 蓬萊今古但聞名。

10 天水茫茫無覓處。

11 海漫漫風浩浩。

12 眼穿不見蓬萊嶋。

13 不見蓬萊不敢帰。

14 童男卯女舟中老。

15 徐福文成多誑誕。

16 上元太一虛祈禱。

17 君看驪山塚上茂陵頭。

18 畢竟悲風吹蔓草。

19 何況玄元聖祖五千言。

20 不言藥不言仙。

21 亦不言白日昇青天。

特に女性の場合、新樂府による蓬萊山故事の理解が一般的であったように、先行の物語文学でも、「宇津保物語」に二例見られるこの故事を元にした記述が、全て「海漫漫」の表現を下敷きにしていること、また、同じ「紫式部日記」の「十一日の暁」(中宮御堂語)の舟遊び記事でも、女房と殿上人の、

「舟の中にや老をばかこつらむ」といひたるを、聞きつけたまへるにや、大夫、「徐福文成誑誕多し」と、うち誦じたまふ声も、さまざま、こよなういまめかしく見ゆ。(二二二頁)

というやりとりが、この「海漫漫」の一節の朗詠によって成り立っていること、などから、「蓬萊山」の故事教養の直接の典故

として新樂府が受容されたことが窺える。

なお、先行研究で、左京の君事件の背景に、白居易の新樂府「海漫漫」を指摘するのは萩谷朴氏で、「今では宮仕えも退いて、稀に五節の舞姫の傳として、恥を忍んで内裏に顔出しした左京は、あたかも蓬萊を見ずして舟中に老いた童男卯女にも等しいと、痛烈な皮肉をこめて、この扇を送った。」とする。ただし左京の君が、萩谷氏が強調するような「恥を忍んで内裏に顔出しした」落魄の境遇ではない、とする点で本稿は同氏の解釈とは異なる。

さらに、「海漫漫」と和歌や仮名文学全体との関係については、本間洋一氏が、「蓬萊山を捜さぬうちは帰れぬと、船旅の中で老いてゆく人々を詠う此句題が意識される事が多いようだ。」とまとめている。この他「源氏物語」胡蝶巻における「海漫漫」引用については、拙論を御参照いただきたい。

以上のように、この場面の贈り物をめぐる暗示的な意味はさまざまなものがある。その中から、今回は漢詩文という鍵で解釈できる部分までを解き明かそうと試みた。その結果、「蓬萊山」の多義性の中で、特に「海漫漫」を重ねて読むことで、左京の君の「古い」に対する揶揄を見て取ることができる。扇に描かれた「蓬萊山は、中年になって再出仕した左京の君を、「未練がましく蓬萊山（しばしば宮中の喻えに用いられる）の周りをうろつく」老いた卯女（少女）」に見立ててあてつけた図柄ということになる。

三、「紫式部日記」返事部分の記述態度と

「ますみの鏡」

この節では返歌の修辭を考察したが、「紫式部日記」には返歌の記載がない。そこで他の作品も参照することになるが、むしろ返歌を書かないことこそが、「紫式部日記」の大きな特徴になっているということも併せて論じたい。

まず、このいたずらには彰子中宮の意向も実成の五節も関係がなく、以下のように、女房達の、左京の君だけに対するものだったと、「紫式部日記」は述べている。

(三) 御前(彰子中宮)には、「おなじくはをかしきさまに
なして、扇などもあまたこそ」とのたまはずれど、「おどろ
おどろしからむも、事のさまにあはざるべし。わざとつかは
すにては、しのびやかにけしきばませたまふべきにもはべら
ず。(サ) これはかかるわたくしごとこそ」と聞こえさせ
て、(シ) 顔しるかるまじき局の人して、「これ中納言の君の
御文、女御どのより。左京の君にたてまつらむ」と高やかに
さしおきつ。(二八一頁)

しかし内大臣からは、五日後に非常に格式ばった返事が来た。
つとめて、内の大殿の御隨身、この殿の御隨身にさしとらせ
ていにける、(ス) ありし筥のふたに、白銀の冊子筥を据え
たり。鏡おし入れて、沈の櫛、白銀の笄など、(セ) 使の君
(教通)の鬢かかせたまふべきけしきをしたり。(ソ) 筥のふ
たに葦手にうきいでたるは、日蔭の返りごとなめり。(タ)

文字二つ落ちて、あやしうことの心たがひてもあるかなと見えしは、かの大匠の宮よりと心得たまひて、かうことごとしくしなしたまへるなりけりとぞ聞きはべりし。(七)はかなかりしたはぶれわざを、いとほしう、ことごとしうこそ。

(一八三頁)

内大臣家からの返事は中宮の弟藤原教通への便りである。これは、先の左京の君への手紙が傍線部(シ)のように、表向き中宮女房からとは言っていないための処置と推測される。

ところで、『紫式部日記』は、内大臣の返歌を記さず、その理由を、傍線部(タ)のように、おそらくは工人の間違いで、葦手書きを銀泥で打ち出した、内大臣の返歌の二文字が抜けたからとされている。しかし、必要ならば『栄花物語』がそうしたように、返歌の文句だけ後から調べることもできたはずである。しかし、この記述は、中宮からの便りに恐縮し、急いで豪華な献上品を捧げた、内大臣の滑稽な様子を強調して描き出している。

この問題に対する先行研究としては、鈴木裕吉氏が、『過剰な贈り物』が祝祭の雰囲気をつぶ壊したかのようなく振りで大仰に取りなした相手側の大人げなさを嘆いてみせるのである。そうして悪戯が深刻ないじめではなかったことを自己弁護しつつ、相手側の返歌を示さないという操作をして、式部側の優越的な立場を保つという方法を取ったのではなからうか。式部たちがけしけけた贈答行為が潜在的に有していた暴力的、攻撃的な意味は、こうして祝祭の喧騒の中に隠し絵のように隠し込まれたものではなかったか。』という見解を示している。鈴木論で、返歌の記載がない

ことを、意識的な「操作」とする指摘は肯首すべきである。しかし、本稿では、その「操作」の意図が、むしろ内大臣家の機知や、中宮方への抗議を隠すためと読む点で、解釈が異なる。それを以下の部分で論じてゆく。

『栄花物語』初花巻の記述「かの局にはいみじう恥ぢけり。宰相(実成)もたゞなるよりは、心苦しうおぼしけり。」(二七六頁)などを考慮すると、内大臣家は、このいたずらを左京の君一人への侮辱というより、実成の舞姫の趣向に対する影子後宮からの不快感の表明と考えたらしい。豪華な結髪道具も、先の贈り物への対応とともに、中宮(と女房達)への弁解と考察できる。

この返事の顛末と返歌が、『後拾遺和歌集』巻十九や、『栄花物語』初花巻に記されているが、内大臣の返歌が、実際は藤原長能の代作であったこと、また、両方で返歌の文言に「かげや」と「程や」と異同があることがわかる。

① かくて臨時祭になりて、二条前太政大臣中将にて祭の使し侍りけるに、ありし箱の蓋に沈の櫛、銀の筭、金の箱に鏡など入れて、使は中宮のはらからなればにや、日蔭とおぼしくて鏡の上に葦手に書きて侍る 藤原長能を

② かくて、この臨時の祭の日、藤宰相の御隨身、ありし宮の蓋をこの君の隨身にさし取らせていにけり。ありし宮の蓋に銀の鏡を入れて、沈の櫛・銀の筭を入れて、使の君の鬢かき給べきくとおぼしくてしたり。この篋の内にいでて葦手を書

きたるは、かの返しなるべし、

日かげ草かかやく程やまがひけんますみの鏡曇らぬもの

を (『栄花物語』初花二七六頁)

内大臣からの返歌は、どの注釈も「宛先が違っています。贈り

物の櫛のお返しに鏡を贈ります。」という趣旨である。

ところで「ますみの鏡」は、文字通りの「鏡」の意味では、

わがつのは みかさのはやし わがみみは みすみつは わ

がめらは ますみのかがみ

(万葉集卷十六・三九〇七「旧三八八五」『乞食者詠歌二首』)

のように「万葉集」に用例が見られる。この後の用例では、和歌

本文ではないが、元慶六年の「日本紀竟宴和歌」下六九番歌の左

注に、

いざなぎのみことのたまはく、われあめのしたしるべきう

づのこをむまむとて、みぎのてにますみのかがみをとりて、

つきよみのみことをいだせり、(以下略)

(日本紀竟宴和歌下・六九「得月夜見尊」源公忠)

とある。この例からは、神話と「ますみの鏡」とのつながりも窺

える。新聞論を踏まえれば贈歌の「日蔭のかづら」に対して、岩

戸から天照大神に捧げられたという「鏡」(神鏡)を詠みこんだ

社交的な返歌となっている。それに加えて、この返歌の「ますみ

の鏡」には、贈り物の「蓬萊山」(海漫漫)に対応する別の意味

もこめられて、完璧な返事となると考えることができる。次節で

はそれを、漢籍における「鏡」の寓意である「皇鑑」の思想から

四、皇鑑思想の受容と「百練鏡」

「鏡」は、文学史上さまざまな意味を付与された事物であつた。その一つが、日本の神話、中国の思想両方に共通する、

「鏡」が人の心の真実を映し出すという観念である。このような

考え方は、ある程度普遍的に見られるものとはいへ、日・中両国

で「貞観政要」の「夫以銅為鏡、以可正衣冠。以古為鏡、以可知

興替。以人為鏡、以可明得失。朕常保此三鏡、以防己過。」(「貞

観政要」論任賢篇 唐太宗)を元に、「皇鑑(鏡)思想」として理

解され、特に日本で「鏡」が「人の心の真実を映す宝器」という

観念に変化してゆくが、その理解の有力な補助となった詩文が、

やはり新樂府の「百練鏡」であった。

百練鏡 辨皇鑑也

1 百練鏡。 11 人間臣妾不敢照。

2 容範非常規。 12 背有九五飛天龍。

3 日辰處所靈且奇。 13 人々呼為天子鏡。

4 江心波上舟中鑄。 14 我有一言聞太宗。

5 五月五日午時。 15 太宗常以人為鏡。

6 瓊粉金膏磨登已。 16 鑒古鑒今不鑒容。

7 化為一片秋潭水。 17 四海安危照掌内。

8 鏡成將獻蓬萊宮。 18 百王理亂懸心中。

9 楊州長吏手自封。 19 乃知天子有別鏡。

10 鈿匣珠函鎖幾重。 20 不是楊州百練銅。

「百練鏡」は、皇帝に対して、楊州産の宝鏡よりも尊い「人の

心」に照らして政治を行うよう勧めた内容の詩である。

まず平安から鎌倉時代初期の和歌では、

さみだれにとくるまがねをみがきつつてる日とみゆるますか
がみかな（能因法師集・二二九「与州にて詠之、楽府和歌百練鏡」）
がはつきりとその受容を示す例で、続いて

なみのうへにもねりしけるかがみかとあやまつばかりすめ
る池水（重家集・五三「池水似鏡」）

のように、現存の和歌では一条朝より後の例しか見えない。

また「百練鏡」を表すのに「ますみの鏡」の歌言葉を用いた例は、祝部成仲の、

よものうみくまなく照らす君なればますみのががみなにか
はせん（成仲集・九一「百練鏡四海安危照掌内」）

及び、

照る月を浪のうへにてみる時ぞますみのががみいる心ちする

の二首がある。さらに後者の判詞として、藤原清輔の
（太皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合「月」九番右勝・六六）

右、百練鏡の心にあや、浪のうへへの月、まことに一片秋潭水
にことならず侍りけむかし、右勝ちぬべし

が残されている。

『紫式部日記』の返歌は、「ますみの鏡」が、前節で考察した
実物の「鏡」（万葉集）から神話（日本紀寛哀和歌下・六九「得月夜見
尊」左注）、さらに新楽府を受容した和歌へと修辭の幅を広げてゆ
く過渡期の例として位置付けられるのではないだろうか。

次に、この贈答が詠まれた寛弘年間に近い例では、『和漢朗詠

集』⁽²⁸⁾ 帝王部（六五五）の、

四海安危照掌内。百王理乱懸心中。

（四海の安危は掌の内⁽²⁸⁾に照らし、百王の理乱は心の中に懸けたり。）
の対句に注目すべきであろう。この詩の後半部、白居易の諷諭の
意が強く出ている部分を「帝王の心得」と理解したものである。

この後、平安末期以降の仮名散文では、原典の逆説的な論理展
開を簡略化して「百練の銅の鏡」即ち歴史や真実を映す宝器であ
る、という正反對の理解が一般化される。なお、この点を太田晶
二郎氏⁽²⁹⁾は、「百練抄」の書名に関して、「原詩は、『百練』の銅の
鏡では古へを鑑み今を鑑みる所以に非ず、とするのであるから、
『百練』抄の題号は、忠実に文字に即して解釈すれば、正反對の
意味となつてしまふわけだが、狭く文字の限りに義を取つたので
はなく、此の二字によつて詩一篇総体の趣意をきかせたものと見
るべきであらう。」と指摘する。

このように、「鏡は帝王の公正の象徴」、「鏡は治国の宝器」と
いう觀念の形成されつつある時代の中で、返歌「ひかげ草かかや
くかげや（程や）まがひけんますみの鏡くらぬものをもま
た、蓬萊宮⁽³⁰⁾（中宮の元）に献上される白銅の鏡を示すことで、
新楽府「百練鏡」全体を連想させ、その原意である「君主の公正
さ」を期待するものであった可能性を読むことができる。つまり
内大臣は、息子の五節全体が中宮の女房に非難されたと感じ、臨
時祭の勅使として宮中にいた藤原教通への便りにかこつけて、彰
子中宮にその不当性を訴えたと考えられる。この和歌と鏡の寓意
を読んで、「女房のやつかみと讒言を押さえてほしい」という趣

旨を言外にこめた返歌ともいえよう。そして、表面の社交的な意味と併せて、中宮女房が潜ませた新楽府「海漫漫」に対応して「百練鏡」を踏まえることで、その術学的な才知に「一矢を報いた応酬」になっているのであった。

五、むすびに

—「紫式部日記」の彰子後宮と漢詩文の位置—

「紫式部日記」は、彰子中宮の栄華を記録することが大きな意義の一つであり、この出来事を含めた寛弘五年の五節は、中宮後宮も深く関つた出来事として、他の「栄花物語」や「枕草子」同様、何かの形で記録されるべきものであった。このような日記全体の性格との関連から、左京の君事件の記述で、返歌が除かれた理由を、結論として考えてみたい。

この事件を彰子後宮の栄華の記録として後世に残す場合、なによりも相手を嘲弄したはずが、逆に自らの非を指摘されて恥をかいたことをそのまま書くことはできない。ここで細工の不備を理由に返歌を記さないことで、内大臣家の慌てぶりが際立つ結果となる。また、中宮に対して「わたくしごと」と言い切り、最後の「はかなかりしたはぶれわざを、いとほしう、ことごとしうこそ」と呼応させることで、内大臣家を恐縮させる、当時の中宮の威勢を、後の読者に窺わせる効果も期待できる。それが、内大臣家からの返歌を省いた「書きなし」の理由と考えられる。

しかし現実には、今回の五節全体の趣向や、返しの細工物から見ても、折にふれての華やかな演出は内大臣家の得意としたこ

ろで、中宮方は日頃「埋もれた」と評される側であった。それが「紫式部日記」では、この場の殿上人とのやりとりも加えて、澁刺とした彰子後宮の雰囲気を描くことになっている。ただし、よく知られた事件という制限の中、中宮方の面子を保つ形での叙述ということもあって、紫式部の意地悪さや、彰子中宮の威勢をかさに着た女房の態度などが先に読まれがちになったのは、作者を離れた作品の運命ともいえよう。

さらに、この挿話を新楽府との関係で考えたとき、「紫式部日記」の他の記事とも興味深いつながりを見てとれる。この作品で有名な新楽府関係の記述は、寛弘年間の「楽府進講」と「十一日の暁」の舟遊び」であるが、後者は先に言及したので、「楽府進講」について述べたい。

御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔をしはべりしを、宮の、御前にて、文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知らしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬものひまひまに、をととしの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮もしのびさせたまひしかど、殿もうちもけしきを知らせたまひて、御書どもをめだう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。

(二〇九頁)

この有名な記事は、「屏風の文字も読めないふりをした」という冒頭の記述から、自己の「才」をこうした「しのび」の形でしか表出できない憂愁を含んだものと読まれるが、同時に中宮に漢

籍を講ずる栄誉も、記述の動機として認められている。また、「十一日の暁」の舟遊びは、朗詠を軸とした殿上人と女房の雅びなやりとりの場面であるが、その典拠となっているのは、新楽府「海漫漫」であった。

これらに続いて、「左京の君」事件もまた、新楽府を軸にした彰子後宮の文化水準を示す記事だとすれば、「紫式部日記」に見られる新楽府受容の様子は、紫式部の進講の成果をひそやかに誇るものとして主張されているといえる。

一方、同じ彰子後宮を描いた「栄花物語」か、やく藤壺巻では、入内当初の様子を以下のように記す。

女房の有様共、彼初雪の物語の女御殿に参こみし人くくよりも、是は目出し。屏風より始、なべてならぬ様にし具せさせ給て、さるべき人くく、やむごと無所々に哥は読せ給。

(一九九頁)

ここから窺える彰子後宮は、傍線部のように、基本的に女房の美々しさ、調度の豪華さや、貴顕から寄せられた和歌などの、現実的な威勢によって賛美される世界である。「栄花物語」と「紫式部日記」の描き方の違いは、作品の性質にもよるが、この他にも、村井幹子氏が、皇子誕生前後の行事での女房の持つ扇の趣味が過剰なまでに華美になってゆく様子の記述から指摘するように、「皇子誕生というきらびやかな王家の慶事が女房の持ち物一つにも大きく影響を及ぼし、彰子後宮の「みやび性」そのものが変容を迫られていかざるを得なかった事情」の元で、紫式部が「みやびの担い手」としての所在無さを憂えていた様子も窺え

る。また、中宮の血縁を含む上流の子女を上臈に据えて格式を高めた代償として、「上臈中臈のほどぞ、あまりひき入りざうずめきてのみはべる。」(一九六頁)、また「いとあえかに児めいたまふ上臈たちは対面したまふこと難し。」(一九九頁)というように、女房自身の才気や、氣の利いた対応よりも、家格や權威を重んずる後宮の様子に対する式部の批判的な思いも随所に表出している。

こうした彰子後宮の中で、女房と殿上人との才気あるやりとりから生まれる「みやび」は、限られた場でしか成立しなかった。従って、「枕草子」のような殿上人との応対の中で、詩文を踏まえたやりとりが多く見える定子後宮のあり方とは、大きな隔たりがある。むしろ、「紫式部日記」の中で、「十一日の暁」や「左京の君事件」のような数少ない後宮のやりとりの記述を通して、「みやび」の担い手としての充足の世界が創造されたことになっている。さらに、それら「みやび」の実例としての「十一日の暁」の朗詠や「左京の君事件」の贈答が、新楽府に関連付けられる意味は大きい。これは、中宮とその女房達が漢籍の受容において、知的に優位に立っていたことを主張することになり、「楽府進講」の記事とのひそかな対応を考えたものといえる。

また、「紫式部日記」では、漢詩文の知識が、中宮女房集団と殿上人や藤原長能(返歌の代作者)のような男性文化人とのやりとりの場で使われている。これは、中宮方への「埋もれたり(二〇〇頁)」という上達部からの批判に対して、彰子後宮の社交における知的水準が男性官人との応対にも耐え得るものであったとい

う弁護にもなろう。

「源氏物語」の広範な漢詩文引用は、紫式部個人の知的水準を示すものであった。しかし、「紫式部日記」の数少ない漢詩文引用の記事は、紫式部が理想とした「後宮のみやび」の創造と、彰子後宮に対する男性官人からの文化面における批判への答という二つの意義を持つて置かれたと結論付けることができる。

注(1) 皇后藤原定子(既に死亡)、承香殿女御藤原元子、弘徽殿女御藤原義子、女御藤原尊子

(2) 安藤重和「紫式部日記試論—寛弘五年五節左京の君事件をめぐって—」(『平安文学研究』五八 一九七七・十二)、「左京の君事件をめぐる客観的側面について—紫式部日記試論—」(『日本文化論叢』五一 一九九七・三)

(3) 原田敦子「紫式部日記と五節—女房の行事記録ということ—」(『大阪成蹊女子短期大学研究紀要』十七 一九八〇・三)

(4) 本文引用は小学館新編『日本古典文学全集本「枕草子」』「宮の五節 出させたまふに」段より

(5) 本文引用は岩波新日本古典文学大系本より

(6) 本文引用は岩波新日本古典文学大系本より

(7) 原田敦子前掲論文

(8) 安藤重和「紫式部日記試論—寛弘五年五節左京の君事件をめぐって—」(『平安文学研究』五八 一九七七・十二)

(9) 本文引用は新編『日本古典文学全集「紫式部日記」』より、本文末尾に掲載頁を記した。

(10) 神事に奉仕する女性が着ける髪飾りで白い絹糸で作つてある。

(11) 本文引用は新潮日本古典集成「紫式部集」より

(12) 安藤重和「左京の君事件をめぐる客観的側面について—紫式部日記試論—」(『日本文化論叢』五一 一九九七・三)

(13) 本文引用は岩波古典大系本より

(14) 萩谷朴「他人事のように見せかけている」(『紫式部日記全注釈』下九三頁下段)。安藤重和「日記執筆時点で左京の君を侮蔑的に見たまま、このあたりの文章を書いているのである。」(注12論文)

(15) 小学館新編『日本古典文学全集「紫式部日記」』一八〇頁頭注15

(16) 新潮日本古典集成「紫式部日記」六八頁頭注2

(17) 新聞一美「五節の舞の神事性と源氏物語」(『甲南大学紀要』文学編一〇七 一九八八・三)

(18) 近藤春雄「白氏文集と国文学 新楽府・秦中吟の研究」(明治書院 一九九〇・一一)

(19) 太田次男・小林芳規「神田本白氏文集の研究」(勉誠社 一九八七)を参照されたい。

(20) 萩谷朴「紫式部日記全注釈」下九三頁上段

(21) 「王朝漢文学表現論考」和泉書院 二〇〇二・二) 三三八頁

(22) 拙稿「源氏物語」胡蝶巻冒頭場面の引用表現—漢詩文と和歌的世界の交錯—(『論叢源氏物語』3 引用と想像力) 新典社 二〇〇一・五所収)

(23) 鈴木裕子「紫式部の表現世界—「源氏物語」と「紫式部日記」と—「贈り物」の視点から」(『紫式部の方法』南波浩編 笠間書院 二〇〇二・十一所収)

(24) ただしこの和歌は現存「長能集」にはない。

(25) 「後拾遺和歌集」「栄花物語」のこの部分の記述の材料については、「紫式部日記」とは別系統であるらしいという上野理氏「後拾遺集前後」(笠間書院 一九七六・四) 三六三頁(第五章 後拾遺集の資料)の見解がある。

(26) 「日蔭の蔓の輝く光にみまごうたのでしょか。真澄の鏡は曇らず照らしているのに、違った人に贈り物を頂きました。」(岩波新日本古典文学大系「後拾遺和歌集」)また、「日蔭草が日光の如く輝く有様と、左京の君が顔を赤らめ恥すかしく介添え役を務めている有様が、両方へかかやく」という表現なので、入り混じり区別がつか

なくなつたのでしょうか。使の君教通様に差し上げるへますみの鏡は曇りませんので、これで真実を映し出して御覧ください。」(安藤重和「左京の君事件をめぐる客観的側面について—紫式部日記試論—」)

(27) 本文引用は新釈漢文大系より

(28) 本文と訓は新編日本古典文学全集「和漢朗詠集」より

(29) 太田晶二郎「百練抄」か「百練抄」か(太田晶二郎著作集「

第一冊 吉川弘文館 一九九一)

(30) 「鏡成将献蓬菜宮」(「百練鏡」)

(31) 「采花物語」初花巻と「紫式部日記」との比較については、池田

節子「紫式部日記」の日記的部分の表現—「采花物語」は「つはな」と比較して—(「国語と国文学」七二—四 一九九五・四)、

佐藤正彦「采花物語の表現—つはな巻と紫式部日記の比較から—」

(「立正大学国語国文」三八 二〇〇〇・三) 参照

(32) 村井幹子「紫式部日記」の主題と構造(一)、「カリタス女子大
学研究紀要34」二〇〇〇・三) なお、この統編として、「紫式部日
記」の主題と構造(2)、「同三五 二〇〇一・三)、「紫式部日
記」の主題と構造(3)、「同三六 二〇〇三・三)がこの問題を
扱っている。

なお、この論は二〇〇三年六月七日の平安朝文学研究会(於早稲田大
学)での同題の口頭発表を元としています。会場での貴重な御意見に深
く感謝を申し上げます。

新刊紹介

松浦友久著

『中国詩文の言語学』

— 対句・声調・教学 —

(松浦友久著作選Ⅰ)

二〇〇二年九月二十六日に急逝された松浦友久文学部教授は、中国古典詩の研究で多大な業績を残しておられるが、大学院時代は岡一男研究室に属し、日本上代漢文学

を研究の出発点となさっているのはよく知られるところである。この度単行本未収の論考を整理し、「松浦友久著作選」(全四巻)として刊行する運びとなった。

第一巻にあたる本書は、中国語学的な関心から執筆された諸論文がまとめられている(猶、本書の構成は生前の松浦教授ご自身の手によってなされたものである)。全体を「対偶論」「声調論」「教学論」の三部分に分ける。第一部では、典型的な孤立語である古典中国語において重要な対偶の問題

を深く掘り下げている。第二部は中国詩の音楽的な要素である声調について考察したものだが、音楽に造詣の深かった著者の際立つ個性を感じさせる。第三部には、研究と同時に教育にも情熱を注がれた著者の中国語(漢文)教育を論じた諸篇が収められている。巻末に古屋昭弘文学部教授による解題を付す。

(二〇〇三年九月 研文出版 A5判 三六四頁 八五〇〇円) 〔門澤功成〕